

第374号 (令和元年6月1日(土)発行)

発行所

京都女子大学 宗教部

京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075 (531) 7074

華利陀

知識と智恵

仏教学非常勤講師 清基 秀紀



知識

中学高校の同級生が日本航空の社長をしていいた。大丈夫だろうか心配もしたが、地位が人を作るのが立派に責任を果たしたようだ。

彼の話によれば、休みの日に一人出社し、机の上の一週間分の書類を処分するそうだ。不必要だと判断した書類をシュレッダーにかけ、十分の一以下にしてスッキリさせる。思わず笑みがこぼれるそうだ。そうやって処分した書類は「知識」だと彼は言う。

彼はパイロットをしていたが、運輸本部長となつた彼の能力が見込まれて経営のトップへと大抜擢された。

地上の組織では最高の結果のために時間をかけて知識を積み重ねていくが、フライト中にトラブルが起れば、限られた時間のなかで状況を認識し、的確に判断しなければならぬ。

その時には積み重ねた知識はいくらたくさんあっても役にはたさない。必要なのは判断が出る「智恵」なのだと言

来。多くの知識を絞って、多くを絞って自分の智恵にする。彼は、そこに会社の未来を見出した。

〔スッタニパータ〕
六五七

人が生まれたときには、実に口の中には斧が生じている。愚者は愚口を言つて、その斧によって自分を斬り割るのである。

仏教の知識

葬儀や法事など、仏教行事を体験する機会はあるが、教えるものにはふれる機会が少ない。大学で仏教を教えていて一番感じる反応は、教えることへの仏教にふれたこと

の驚きと喜びである。「仏教がこんな教えたとは知りませんでした」というのが多くの学生の正直な感想である。

しかし、一般には教えるにふれる機会が多くない。そこでテレビでは、仏教に関する「知識」をクイズなどで伝える番組が多く作られる。

ところが、視聴率を意図するテレビ番組では、面白い興味本位の情報が中心となり、断片的な豆知識ばかりになる。テレビは、映像で見せてすぐわかるような知識は伝えているが、考えることを求める「教え」は伝えない。

友人がお坊さんの出るバラエティ番組に出ていたが、ほとんど発言をしなかったので不思議に思つて後で聞くと、まともな仏教の話をして、面白くないから編集でカットされたようだ。

テレビで語られる知識は、知つたとしても私たちの人生にとって意味をもたない。煩惱がなぜ百

智恵

八つのか教え方を知つたところで、私たちの生き方や人生に対する考え方が変わるわけではない。

仏教は、人生をよくよく見つめれば、さまざまに苦悩に満ちていると言ふ。永遠なものは何ひとつないという真理は、必ず悲しい別れを経験するという苦を伝える。求めなくても手に入るわけではないことも苦である。

しかし仏教は、その苦に對して、私たちの考え方を考えることによつて、苦から解放されると教えてくれる。欲しいものが手に入ったとしても、また別のものが欲しくなり、人間の欲にはキリがない。その苦から逃れるためには、欲しいという思いから自由になることだ。そもそも、それが手にいれなければ、本

当に不幸なのだろうか。単なる知識として知るだけではなく、自分の問題として考えることにより、それは「智恵」となる。

キサー・ゴータミー 仏教では有名な話であるが、キサー・ゴータミーという女性がいた。長者に見初められて玉の輿に乗ったが、子どもがなかなか出来なかつたので不

安をかかえていた。当時のインドでは子どもが出なければ離婚された。ようやく子どもを授けられたが、まだ赤ん坊の時に息をひきとつた。何とか生き返らせられなかったか尋ね歩すが、そんなこと出来る医者はいない。

ある人が、お釈迦さまに相談してみればと教えられた。お釈迦さまは、芥子の実を三つもらつてきなさいと言われる。インドではどの家庭にもあつたので、簡単なことのように思えた。しかし、一度もお葬式を出したことの、お釈迦さまは付け加えられた。

勉強と学問

大学生になるまで、私たちは受験勉強をする。2000年の春に京都女子大学に着任してから今年で20年になります。初めての専任職に緊張を感じながら、兵庫県西宮市から約2時間をかけて通勤することになった私にとつて3歳の娘を毎朝保育園に送り届けるのは気が引けた。6月の雨の朝、「雨かあ、うつつうしいなあ。大学に遅れないようにしなさい」と、私は先に控えている自分の仕事に思いをめぐらせ、少し焦りを感じながら保育園へと車を走らせていました。

すると、後部座席を外を眺めていた娘が、「おかあさん、お花や木が嬉しそうにしているよ。きつと、娘の感性が揺さぶられた瞬間だと感じました。

大人は目の前の忙しさと自分の都合で、「早い通勤することになった私にとつて3歳の娘を毎朝保育園に送り届けるのは気が引けた。6月の雨の朝、「雨かあ、うつつうしいなあ。大学に遅れないようにしなさい」と、私は先に控えている自分の仕事に思いをめぐらせ、少し焦りを感じながら保育園へと車を走らせていました。

すると、後部座席を外を眺めていた娘が、「おかあさん、お花や木が嬉しそうにしているよ。きつと、娘の感性が揺さぶられた瞬間だと感じました。

大人は目の前の忙しさと自分の都合で、「早い通勤することになった私にとつて3歳の娘を毎朝保育園に送り届けるのは気が引けた。6月の雨の朝、「雨かあ、うつつうしいなあ。大学に遅れないようにしなさい」と、私は先に控えている自分の仕事に思いをめぐらせ、少し焦りを感じながら保育園へと車を走らせていました。

すると、後部座席を外を眺めていた娘が、「おかあさん、お花や木が嬉しそうにしているよ。きつと、娘の感性が揺さぶられた瞬間だと感じました。

大人は目の前の忙しさと自分の都合で、「早い通勤することになった私にとつて3歳の娘を毎朝保育園に送り届けるのは気が引けた。6月の雨の朝、「雨かあ、うつつうしいなあ。大学に遅れないようにしなさい」と、私は先に控えている自分の仕事に思いをめぐらせ、少し焦りを感じながら保育園へと車を走らせていました。

ことに気がついた。永遠なものなど何ひとつないのだから、それに執着してはならないという真理を、お釈迦さまはこういう形で教えてくださった。それを自分で気がつくようにしてくださったのだ。

諸行無常、永遠に変わらないものはないという「知識」は、彼女が自分の問題として考えることが出来た時に、ようやく「智恵」となったのだ。

もはや執着から離れた彼女は、すべてを捨てて、お釈迦さまの弟子となつた。

勉強とは、勉めるように強いることだ。無理にでも努力をして励むことが求められる。私たちの興味とは関係なく、入試に合格するために、がんばつて覚えなくてはならないのだ。

しかし大学生になれば学問をする。それは勉強と何が違うのだろうか。私たちは、学ぶだけではないのだ。

スマホで簡単に情報が得られる時代、二ページに収まる教養が本には書かれていない。そこで得られる「知識」ではなく、自分の問題として考える問をもつて深く考えることこそが、「智恵」ではないのだろうか。

感性はこのような直接的な体験を通して育まれていきます。環境に主体的に働きかけて遊びの中で、子どもは面白さや楽しさを感じて心を動かしています。児童学科の学生さんたちに、子どもの表現の基となる感性の育ちを見逃さず読み取る大切さを伝えていきたいと思ひます。

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

Table with 2 columns: 令和元年6月 月例礼拝日程表 and 令和元年7月 月例礼拝日程表. Includes dates, times, and names of participants and speakers.

Table with 2 columns: 令和元年7月 月例礼拝日程表. Includes dates, times, and names of participants and speakers.

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

今年3月、京都幼稚園の子どもたちと和楽器に触れる機会を持ちました。拍子木や締め太鼓、鉦やチャップパ(二枚組の小型シンバル)などが並べられて、子どもたちは珍しい和楽器を次々に急かしてしまいがちで

私は四月の終わりに群馬県邑楽郡倉敷町佐貫にある宝福寺を訪れた。この地は親鸞聖人が四十二歳の頃、人々を救いたいと、三部経(無量寿経・阿彌陀経)を千回読むことを思い立つた地である。しかし、阿彌陀仏の教えを信じて念仏するほかに何の不足があるのかと思ひ返し、四、五日経つた頃その説話を中止したと恵信尼(親鸞聖人の妻)の手紙に認められている。

親鸞聖人は六角堂の百日間参籠を経て二十九歳の時に法然門下に入つていく。この時に阿彌陀仏の教え、つまり他力の教えに帰依したのである。それにもかかわらず、どうして十三年を経た四十二歳の頃に、自力の行である三部経説話を試みたのであろうか。そのような疑問を持ちながら佐貫を訪ねた。

訪ねたからといってその疑問がすぐに解決するはずもないが、近くには利根川が流れており、利根川の氾濫や早魃があつて、苦しむ人々を救わずにはおれない心持ちから、比叡山時代身についていた三部経千部説話といった自力の行に走つてしまつたのか、などと考えるてみたつもりだ。

大事なのは手紙の中で、阿彌陀仏の教えを信じて念仏するほかに何が足りないと思つて読誦しようと思つたのか、と反省されて止めたことであらう。背景に何らかの厳しい状況下にあつた人々を何とか救いたいという思いがあつたのは間違いない。

バスを待つこと二時間、結論の出ない問題について考える貴重な時間を過ごすことができた。

バスを待つこと二時間、結論の出ない問題について考える貴重な時間を過ごすことができた。

バスを待つこと二時間、結論の出ない問題について考える貴重な時間を過ごすことができた。

バスを待つこと二時間、結論の出ない問題について考える貴重な時間を過ごすことができた。

(普)



子どもたちとともに

③みずみずしい感性に触れて思う

(児童学科・岡林 典子)



スピリチュアリティと幸福な老い

発達教育学部教授 岩原 昭彦

レジリエントな老い

加齢に伴って、慢性疾患に罹患することや、身体的機能や認知的機能が低下することは避けられない。疾患や障害、依存、抑うつといった高齢者に対するネガティブなステレオタイプが、世の中にはびこっている。加齢に対してネガティブなステレオタイプを強く持つ高齢者は、循環器疾患や認知症に罹患しやすいことが明らかになってきた。一方で、ポジティブな思考が、余命の延長、疾患の発症予防、身体的・心理的なwell-beingの向上、認知機能の向上などに寄与していることも明らかにされている。

財政的困難などの個人にとって耐え難い出来事に遭遇したとしても、それらの逆境に打ち勝つレジリエンスという力を入れている。多くの高齢者は、身体的な機能の喪失や、定年退職や失業による経済的自立の喪失、離婚や死別による親密な対人関係の喪失のようなさまざまな逆境に直面し、ストレスフルな生活を送っている。レジリエントな高齢者は、逆境から回復し、自己の価値や人生の意味を追求し続け、逆境から新たなことを学ぶとともに逆境をきっかけとしてさらに一歩前進することができる。事実、レジリエンスの高い高齢者は、身体的な健康状態が良好であり、主観的幸福感が高く、余命が長い。

心身の安定性には必要のない幸福は低下しないという知見も数多く報告されている。とはいえ、なぜレジリエントな高齢者が老いの超越を生み出すのかに関しては明確な答えが現時点では得られていない。私が重視している考え方は、死生観とスピリチュアリティと幸福な老いとは密接な関連性があるというモデルである。高齢者はこれまでの人生の中で、幾度となく喪失、死別を経験してきた。その経験を積み重ねる過程で、自身を見つめなおし、生命の限界を感じてきた。そのような体験が、未知なる物に対して強い信頼感を抱かせ、超越的次元や時間的次元などに自己を統合させていくような作業を高齢者に行わせる。このような作業を通じて高齢者は、「死の恐怖を乗り越え

た」「老化して変わっていくことを受け入れることができる」「今になって人生の意味がはつきりと分かるようになった」というような考え方を抱く段階、まさに老いの超越という段階に達するのである。

スピリチュアリティと幸福

日本ではなじみの薄い考え方もされないが、世界的には、宗教的信仰と幸福には一定の関連性があるというのが定説である。デビッド・マイヤーズ(幸福感研究で著名な心理学者)の有名な論文では、幸福感を追求する要因として重要なのは、①経済的成長や個人の収入、②友人などの親密な関係、③宗教を中心とする信念であると論じられている。宗教的信念を持ち、宗教に関わる日常生活の頻度が高い人の方が、そうでない人よりも、幸福感が高く、高齢になっても健康を維持し長生きしていた。宗教性が高まることにより、①他者に対する尊敬や感謝が高まり、他者を許す寛容や慈悲を獲得するようになる、②自身の人生の目標を探索し、人生の意義を見出すようになる、③他者との関わりが深くなり様々な援助や支援が得られるようになることが明らかにされている。まさにこれらの状態が心理学研究におけるスピリチュアリティと呼ばれるものである。超越的

な何かを自覚することで、自分自身について、他者との関係について、さらには世界や超越者との関係について、ある一貫した価値観が抱かれ、生活経験が一定の特徴を持つようになっていく。そのスピリチュアリティという状態が、健康にとって好ましい生活習慣を送らせるようになるだけでなく、ポジティブな感情を高め、QOL(quality of life)を向上させる。

疾患や障害があっても、高いQOLや幸福感を保ち続けることができる。完全な自立はできなくても、社会的資源を活用することで、自分のできる範囲で自分のことを決められる可能性がある。たとえ健康寿命が尽きたとしても、障害と共に生きるようになったとしても、個の尊厳は失われない。健康であり続けようとする姿勢は重要であるが、健康でなくなったとしても、私達は成長し続けることができるはずである。このことに対して、スピリチュアリティや死生観が果たす役割は大きいと思われるが、十分に実証されたといえる状況にはない。キューブラー・ロスが言う、「スピリチュアリティは希望を生む」という意味を心理学的な観点から医学や看護学、宗教学と協働して探究していきたい。

お知らせ

宗教・文化研究所公開講座(ご案内)

シリーズ：東山から発信する京都の歴史と文化②
テーマ：院政期の政務と女性・芸能

開催日 6月15日(土)

第一部 13:00~14:30

「院政期の朝廷政務」
講師 立命館大学文学部教授
美川 圭 氏

第二部 15:00~16:30

「院政期の女性と文化・芸能」
講師 川村学園女子大学文学部准教授
辻 浩和 氏

場 所 B501

* 本願寺書院拝観(前期) *

日 時 6月26日(水) 15:15~17:00

場 所 本願寺書院

募集人数 30名(先着順)

参加費 無料

※申込・詳細は京女ポータル、L校舎前の掲示板または宗教教育センター(L校舎3階)で確認してください。

シリーズ 智慧の蔵 24

『初期仏教―ブツダの思想をたどる』

馬場紀寿 著 岩波新書 二〇一八年



本書は、今注目の仏教学者、馬場紀寿氏の最新著作である。新書の分量で、一般及び仏教学初学者の大学生から、専門家までの読者層を受け入れる。第1章は仏教の誕生、第2章、初期仏典のなりたち、第3章、ブツダの思想をたどる、第4章、贈与と自律、第5章、苦と渴望の知、第6章、再生なき生を生きる、以上の構成であるが、ここだけを見ると、従来の仏教入門書と大差なく、教科書的に読んでも十分な知識が得られる。しかし、それぞれ従来説を踏まえながら、最新説とそれに伴う自説が盛り込まれている。

本書のテーマは、その名の通り初期仏教である。とはいえ、著者の関心はブツダ時代の直説の仏教というよりも、むしろ仏教の変容を、初期仏典の変容に関係させて考察していくことにある。その方法論として、世界の仏教学研究者が連綿と受け継いできた、膨大な仏教文献を厳密に読み込み、「資料が物語る最古層の仏教」を描き出そうとするものである。これまで、最古層の仏教にせまるには、パーリ語仏典の精査が最も適切だと考えられていた。しかし、著者はこのあり方に必ずしも肯定的ではない。

著者は本書の中で、パーリ語で完備される「三蔵」は、上座部大寺派という仏教の一派が伝えたものであることを前提におく。実は我々は、仏教が未分裂であった時代のことを知らないし、知る術もない。我々が知り得る初期の仏教とは、最初から複数の部派がインド各地に点在していた時代の仏教である。仏典の出発点は、律文献によると、ブツダの涅槃直後に、五百人の弟子が王舎城にて、彼が最も適切だと考えられていた。しかし、著者はこのあり方に必ずしも肯定的ではない。

それを部派分裂と呼ぶ。著者はこの仏典を「結集仏典」呼び、法と律を指すと言う。しかし、ここには小部と言われる経典群は入っておらず、これは後から盛り込まれた。後から盛り込まれた「三蔵」となったこの編纂順序を指摘する。そのため、従来言われてきた、小部経典に多い韻文で書かれた経典がより古層であり、散文の方が新しいという説に疑問を呈するのである。

このように本書はオーソドックスな方法を取りながら、チャレンジングな面も持つ良書である。

法のことば

人が生まれたときには、実にもの中に斧が生じている。

愚者は悪口を言って、その斧によって自分を斬り割るのである。

(「スッタニパータ」六五七、中村元訳)

仏教では、行い(業)を身口意、すなわち身体の動作、言葉、意思の三種に分けて考えます。外面的な行いは目にとまりやすいですが、仏教の考え方からすると、すべての行いの根本には心の働きがあり、行いが善くなるのも悪くなるのも心によります。言葉の使用もまたそれと同じ「行い」であるのに、私たちは、身体的な行いよりそれを軽く見てしまいがちです。しかし、言葉による傷は、身体的なそれと同じように、あるいはそれよりずっと深くまた長く残る傷となりえます。そして私たちはしばしば言葉を用意に振り回して、他者ばかりでなく、自分自身をも傷つけています。人が生まれながらにして持つ口の中の斧という比喻により、積善はそのことを戒めているのです。

(藤井 隆道)